

海外研究発表会報告

報告者：池田玲子・舘岡洋子

1.	日程	2014年 4月 27日
2.	地域（概要含む）	中国 北京（北京師範大学）
3.	担当者（人数・役割）	朱桂栄（北京外国語大学北京日本学研究センター）・林洪（北京師範大学）・舘岡洋子（早稲田大学）・池田玲子（鳥取大学）
4.	形態	ポスター発表、ラウンドテーブル、全体討論
5.	主催	協働実践研究会 北京支部 第7回 代表：朱桂栄
6.	テーマ（タイトル）	「なぜ協働か」
7.	内容の概要	<p>総合司会：古屋憲章（早稲田大学大学院博士後期課程）</p> <p>1. 開会のあいさつ 朱桂栄（北京外国語大学北京日本学研究センター）</p> <p>2. ポスター発表</p> <p>① 趙冬茜（北京外国語大学北京日本学研究センター博士課程） 「最近接発達領域による学習方略の変容」</p> <p>② 周 撲（重慶大学） 「プレゼンテーション訓練におけるピアフィードバックと内省の分析－ピア・ラーニングを導入した場合－」</p> <p>③ 神村初美（首都大学東京） 「ピア・リスニングに見られる留学生同士の互恵的な学び－聴解の過程に注目して－」</p> <p>3. ラウンドテーブル「なぜ協働か」</p> <p>◆話題提供者</p> <p>① 李同艶（天津財経大学）「科学技術日本語読解授業におけるピア・リーディングの実践及びその問題点」</p> <p>② 錢坪玲子（長崎ウエスレヤン大学）「新しい能力評価という視点から試みる、協働学習、ピア・ラーニングの再検討」</p> <p>③ 菅田陽平（華東師範大学）・駒沢千鶴（北京国際関係学院外語学院）「課題型ピア活動から考える作文教育－授業時間外でのピア活動を促す試みとして－」</p> <p>グループ・ディスカッション</p>

		<p>4. 論点整理・グループ・ディスカッション・全体討論</p> <p>5. 閉会の挨拶 林洪（北京師範大学）</p> <p>*懇親会</p>
8.	参加者 (人数・背景・声など)	約 50 名
9.	担当の内省	<p>協働実践研究会の海外支部主催による研究発表会の開催は今回が初めての試みだった。</p> <p>本会開催のきっかけは、館岡洋子氏が同時期到北京外国語大学北京日本学研究センターでの集中講義担当のために北京に長期滞在中だったことだった。滞在中、北京支部代表の朱桂栄氏との相談により、この時期到北京師範大学で開催される中国日語学会の最終日の午後に、同じ会場を借りて協働実践研究会第7回（北京支部第1回）の開催が可能となった。これには北京師範大の林洪氏のご尽力があつたことだった。</p> <p>本会が最初の海外研究発表会だったにも関わらず、中国北京だけでなく、天津や上海からも、また日本からも東京と九州から発表者を迎えることができた。参加についても、当初予想していた人数を上回り、熱心な参加の様子があがえた。</p> <p>総合司会の古屋氏の提案で、後半にはラウンドテーブル形式とした。おそらく中国では初めての討論形態の実施だったと思われるが、参加者は戸惑うことなく、非常に発熱した議論が展開されていた。</p> <p>全体共有の場では、中国での協働学習を考えると、何が課題となるか、どのような困難があるのか、まず検討すべきはなにかということが、それぞれのグループから出された。</p> <p>また、「実践研究」の風土がない中で、今回の研究会は教師自身が実践の改善のために「実践研究」をしていくことの重要性を実感した。また、異なったフィールドにおける多様な課題の中に各参加者は多くの共通点を見出すことになった。</p> <p>参加者には、こうした深い議論を経た後に、即座に一つの解答にたどり着けはしない、見えてきたのは今後を追究していくべき多くの課題だ、とい実感をこの体験から得てほしい。</p>
10.	次回への課題	今回の開催によって得られた企画、準備等の知識をもとに、今度も海外支部での研究発表会を開催していきたい。国や地

	<p>グループディスカ ッション</p>	
--	--------------------------	--

	全体共有	
	閉会の挨拶 林 先生	